

産業学習へのアプローチ方法～系統地理と地誌、それぞれにおける展開例と特徴～

北海道札幌月寒高等学校 鈴木良伸

1. はじめに

地理の授業において、産業学習（農林水産業、鉱工業を中心として）は、関連する貿易や流通・食料問題・環境問題等を含めると、学習内容の半分近くを占めるといっても過言ではない。地理学にとって大切なことは、各地域の人々の生活が、自然環境や社会環境の影響を受けながらどのように営まれているか、そして、世界の各地域がどのように結びついているかに焦点を当てることである。そう考えた場合、人々の生活の営みの実態が一番よくわかるのが産業学習であり、当然、学習内容もこのことが中心となってくる。つまり、生徒が地理を好きになるかどうかは、この分野の授業に生徒が興味をもって意欲的に取り組めるかどうかにかかっている。そういう意味では、この分野は先生方もいろいろと試行錯誤をしながら、日々の授業実践を行っていらっしゃると思う。私見ではあるが、自分なりに産業学習におけるアプローチの仕方、日頃の実践で気づいたことをご紹介します。

2. 「系統地理」と「地誌」それぞれの観点から

地理の授業の展開は、各地域の結びつきを概観する導入部を除くと、まず世界の自然環境（世界の地形・気候、関連した地形図の読図等）を、続いて世界の社会環境（人種・民族・言語・宗教等）を学習するのが一般的である。ただし、その後の授業展開は、

- ①系統地理的に世界の農業・鉱工業等を概観（その各地域ごとを詳しく学習）する方法
- ②各地域の地誌の中で産業学習として農業・鉱工業等の特色を学習させる方法

の二つのパターンがある（おそらくほとんどの先生方はこのどちらかで指導されていると思われる）。したがって今回は、まず、この二つの視点から、それぞれの特徴、メリット・デメリットなどを具体的に挙げ、さらに産業学習そのものに、より興味をもたせるための工夫等も紹介していきたい。

①「系統地理」的なアプローチの場合

まず、「系統地理」的なアプローチの場合だが、農業においては、世界の自然環境（地形・気候・植生・土壌）

を学習した直後に行うので、自然環境の関連性を考察しながら、より学習を深めることができることがメリットとして挙げられる。

次ページの図1、図2の二つの地図を比較すると、農業地域が、気候に密接なつながりがあることを世界的な視点でよく理解できる。関連して『新詳高等地図 初訂版』（以下、地図帳）p.110「②世界の植生分布」や「③世界の土壌分布」を確認させるのも効果的である。また、『新詳地理資料COMPLETE 2011』のp.64～65は、農業のまとめがコンパクトに無駄なくまとめられている。地図帳と同様の図もあるので効果的に利用したい。鉱業においても地図帳裏見返し「⑤世界の地体構造」と、p.115～116「①エネルギー資源の生産と消費」「②鉱産資源」を比較させることによって関連性を見出すことができる。全体を概観した上で、各地域の農業地域や鉱産物の分布を見ることにより、ほかの地域との比較がよりわかりやすく体系的に学ぶこともできる。

要するに、「系統地理」のメリットは産業学習がグローバルな視点で学べ、どの地域においても地理的な見方が同じ発想で考察できブレが少ない。各産業を学ぶ上での基本的な考え方が定着しやすく、きちんと整理された状態で理解できる。

逆にデメリットだが、世界を概観しただけの知識では各地域特有の地形や気候、さらに歴史や文化的背景といった、地域を理解する上での基礎的知識が不十分であり、これらの項目について補足が必要となる。しかし、体系的ではなく断片的に必要な知識を説明しても、地域の特徴が印象強くは残らない。また、後半で「地誌」的な学習をした場合、産業学習を終えているため、歴史や文化的な面が中心となり、既習事項も多く、生徒の意欲も減退しかねない、さらにいっそうの興味・関心をもたせる工夫が必要となる。

②「地誌」的なアプローチの場合

続いて、「地誌」的なアプローチの場合だが、各地域の地域性（地形・気候・歴史・文化）をふまえて学習することができ、その地域の特徴を理解しながら学べるの



図1 『新詳高等地図 初訂版』 p.109~110 ①世界の気候区と海流

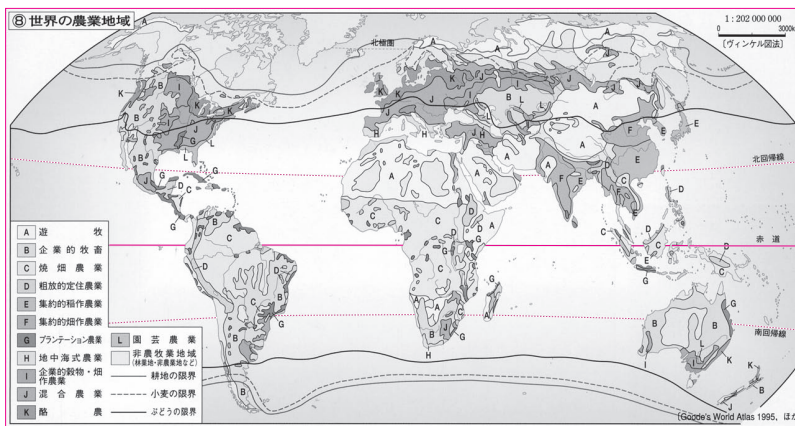


図2 『新詳高等地図 初訂版』 p.118 ⑧世界の農業地域

で、ひじょうに印象深く、記憶に定着しやすいというメリットがある。とくに歴史的・文化的背景は地域性を示す上では重要で、各地域の特色が際立ち、生徒も興味・関心を強くもち、効果的学習が期待できる。

一例として、『世界の諸地域NOW 2011』のp.43「⑧各地の料理と農業」(図3)などは、同じ中国内でも気候の違いにより、小麦を原料とした主食が多い華北、米を主食にした華中、内陸の蒸し暑い気候を配慮した香辛料の効いた料理でおなじみの四川など、各地域の気候と食文化の関連がよくわかり興味深い。

それに対し、デメリットとしては、各地域ごとに何度も同じような基本事項を確認していかなければならず、生徒の興味・関心を持続させる工夫が必要となる。その

ため、効率よく授業を進めるといいう点では、時間的に無駄な部分もある。また、体系的に学んでいないため、同じような他地域との共通点、グローバルな視点での考察が難しい。最終的に、各産業の特色を系統立てて理解する上で多少回り道をすることになる。

3. 「系統地理」と「地誌」とをバランスよく

では、実際の私の授業はどうかというと、条件付きの「地誌」的なアプローチで行っている。条件つきとは、代表的な農業の分類を気候学習と織りまぜて行い、工業に関しては立地条件のみを独立した形で取り扱う。その後、日本に近いアジア諸国から順番に、「地誌」的な授業を展開している。授業を終えて定着をはかるために問題演習もやらせているが、使っている教材が系統地理的にまとめられているので、それを逆手にとって、問題演習を通じて、各産業を体系的に整理

する工夫をする。やはり、生徒の興味・関心を喚起させるという点では、各地域の特徴を出しやすい「地誌」的な展開のほうが、有利なようである。

4. 産業学習の進め方で意識していること

ここで、もう一度、各産業学習の授業で私自身が意識して行っている(考えている)ことを整理したい。

まず、農業については、自然環境のうち気候との関連を中心に話をすすめ、それに土壌や植生のことも絡める。次に社会環境としての歴史的背景、とくに植民地支配との関係は農業面では影響が大きいので必ずふれる。さらに各地域の中心となっている農業形態を強くイメージさせる。場合によっては、地域と国を使い分けて、より印象強く特徴を示す。たとえば以下のような感じになる。

- ・ アフリカ…プランテーションと自給的農業
- ・ ヨーロッパ…商業的農業発祥の地
- ・ アメリカ合衆国、アルゼンチン、オーストラリア…企業の農業の3拠点国 など

次に、鉱業については、世界の大地形との関連、貿易(流通)と工業の関係、とくにエネルギー資源に関しては、原子力やクリーンエネルギーとの関連にも注目させる。

工業については、立地条件・歴史的背景を確認し、貿易での物流の動きに注目させる。また農業と同じように

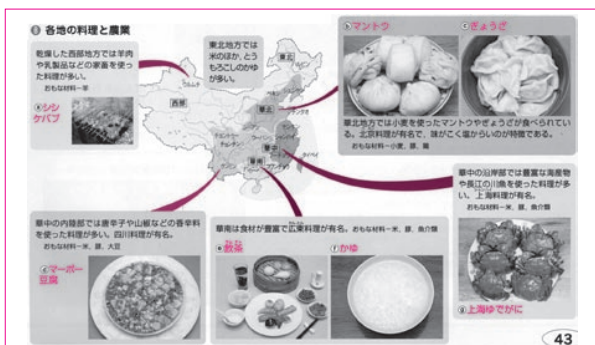


図3 『世界の諸地域NOW 2011』 p.43 ⑧各地の料理と農業

鉱工業の形態を強くイメージさせ、印象強く特徴を示すと以下ようになる。

- ・ヨーロッパ、アメリカ合衆国…工業の中心地域
- ・ラテンアメリカ、オーストラリア…鉱業の拠点地域

水産業については4大漁場の実態と関連する各国の特徴、林業については、冷帯林の需要の多さとロシアとカナダが貿易面では突出していること、アマゾン川流域と東南アジアでは熱帯林の破壊が問題になっていることをふれる。

以上のように、各地域ごとの産業の特色がわかるよう、かなりの絞りを、余計な部分を削ぎ落とし、ある面ではかなりデフォルメされた地域性が出る展開をしたほうが、生徒はより印象強く、興味をもって意欲的に学習するようである。

5. より印象強く産業学習を進めるための工夫

最後に、産業学習をより効果的に行うために、自分なりに工夫してきたこと（その結果生徒の反応がよかったこと）を紹介したい。

①パネル写真

いくつかの出版社から出ているパネル写真（学校の学習机を一回り大きくしたサイズ）は、大変使い勝手がよく、頻繁に活用している。小さくて見づらいものが写っている場合は写真そのものを手渡しでまわしていく。

②個人的に旅行先で撮った写真

個人的に旅行先で撮った写真も活用している。撮った本人がどのような場面をどういう状況で撮ったかを事細かに説明できるので、たいへん説得力がある。下の2枚の写真は、タイへ旅行したときに撮った、チャオプラヤ川（アユタヤ郊外）（写真1）と、バンコク郊外のドライブインで見かけたフルーツ屋台（写真2）の写真である。

タイの穀倉地帯として有名なチャオプラヤ川流域は、雨季の降水量の多さから「浮稲」をつくっているイメージが強いが、実際には、現在ではあまりつくっておらず、乾季（1月撮影）のチャオプラヤ川は、意外に川幅も狭



写真1 チャオプラヤ川（アユタヤ郊外）

く大河というイメージがないこと、生えているやしは野生のもので、このような風景はタイではごく一般的なことであることなどを写真を見せながら説明する（写真1）。

バンコク郊外のドライブインのフルーツ屋台では、売られているフルーツの種類に着目させる。おなじみのパイナップルやスイカ以外に、マンゴーやパパイヤもあり（ホテルではグアバもあった）熱帯性の果物の豊富さと日常的にこのような果物が食べられていることなどにふれ、気候に応じて食生活もバラエティ豊かであることに気づかせる。一枚の写真からいろいろなことが見えてくる。自分で撮ってきた写真は、著作権フリーのため、資料などを作成するときも余計な心配が必要ない。

③実物の提示

これは、実に単刀直入な方法であるが、生徒の反応はすこぶるよい。具体例は以下の通り。

ア. 鉄鉱石・ボーキサイトなどの鉱物

以前の勤務先が室蘭市だったこともあり某大手製鉄所の知り合いの方からわけてもらったものである。製鉄所で使う原料は、粉碎されたものだが、特別にこぶし大の塊も手に入った。普通の石より重く、放置していたので表面に赤錆が出ている。ボーキサイトは色がオレンジに近く、まさにラトソルの色で、熱帯地域からしか産出されないことに生徒は納得する。

イ. 小麦・稲の穂、そばの実など

写真だけではなく、感触を確かめ、世界2大穀物の違いを直に感じる。比較的香辛料等は手に入りやすい。お茶の実が手に入れば、地図記号との関連などもついでに説明できる。

6. おわりに

とりとめのない私見をまとめたただけで、はたしてどの程度、ご参考になったかは甚だ疑問が残るが、まずはいろいろと試してみることが大切である。失敗を繰り返しながら生徒とともに考えていく。この姿勢を忘れずに、私も未だに試行錯誤を繰り返す日々である。



写真2 フルーツ屋台（バンコク郊外）